



人の嗅粘膜の顕微鏡写真。矢印は嗅神経細胞に分化する細胞（大阪大提供）

手術ではまず背中を切開し、脊髄の損傷部位を出す。

▼海外で127人  
〇〇年代に開始、大阪大もこの方法を用いる。

「嗅覚は一時鈍るが、嗅粘膜は再生するため通常数カ月以内に回復するという。」

「体温や脈拍などの自律神経系や、感覚の改善も若干見られる。ただ、自立歩行は難しく、機能回復はわずかだと言わざるを得ない」（同科）。

手足などを動かそうとする脳からの指令は、脊髄の中の神経線維を通して手や足などの各部に伝わる。一方、痛みや熱さといった

がでなくなることもある。主な治療法はリハビリテーションだが、効果に限りがあるのが現状という。そこで注目されているのが、鼻の奥の嗅粘膜にあり、

研究グループの岩月幸一講師は「国内での有効性や安全性を確認する初めての臨床研究で、治療法の開発を目指すもの」と言う。嗅

# 鼻粘膜で脊髄機能改善

## 年内にも臨床研究スタート

# 損傷部に移植、神経再生



吉峰 俊樹 大阪大教授

主任研究者の吉峰俊樹教授は「脊髄は脳から続く中枢神経で、脳と体の間で信

折れたりずれたりすると、中を通る脊髄も傷み、体の動きだけでなく排尿や呼吸

トガル百一人、コロンビア十四人、ギリシャ七人など計百二十七人。運動機能の

条件。手術後のリハビリは入院して半年一年、その後二三年続けてもらう。

交通事故などで損傷した脊髄（せきずい）に本人の鼻の嗅（きゅう）粘膜を移植し、運動や感覚機能の改善を狙う臨床研究を、大阪大病院（大阪府吹田市）脳神経外科が年内にも始める。嗅粘膜に含まれる神経が再生能力を持つことを利用、海外では回復傾向が見られているという。

非常に再生しにくい」と治療の難しさを説明する。スポーツや事故で背骨が折れたりずれたりすると、中を通る脊髄も傷み、体の動きだけでなく排尿や呼吸

同脳神経外科によると、昨年九月にイタリアで開かれた国際会議での経過報告では、実施されたのはポルトガル百一人、コロンビア十四人、ギリシャ七人など計百二十七人。運動機能の

対象は、両足が完全にまひした患者で①自然に治る可能性のある急性期を過ぎ損傷から半年以上たっている②損傷部は三センチ以下③年齢は七歳以上、嗅粘膜が減る前の四十歳まで一などが条件。手術後のリハビリは入院して半年一年、その後二三年続けてもらう。

大阪大病院脳神経外科

医療新世紀

▼効果は未知数

大阪大病院では、五年で四十人に実施する計画で、今年一月から患者の登録を始めた。